はしがき①

ダニエル・エンティン

レーリヒは1920年10月にニューヨーク港に着きました。その前の1年間を英国で過ごした後でのことです。英国ではニコライ・レーリヒの絵画展があり、それに加え彼のオペラと舞台と衣装デザインが意義深い成功を博したのでした。ロンドンにいる時、芸術家レーリヒはシカゴ美術館からアメリカへ招かれました。絵の大美術展を開く計画で、アメリカ中を3年間旅し、30の都市を見て描いた絵を展示するというものでした。

この招待は非常に時宜を得ていました。というのもレーリヒと妻のエレナの両方とも、その時すでに「生きた倫理」の教えの発展のために真剣に活動していたのです。その教えは彼らの霊的生活の柱となり、この後の公的で創造的な生活の始まりを告げたのでした。この教えはレーリヒ夫妻により、秘められた知識を持つ高位のアデプトたちとのつながりとして書き留められました。このアデプトたちはヨーロッパにおいて秘教哲学（esoteric philosophy）の主要な代表者を多数導きました。そして19世紀の終わりから、マハートマたち、あるいは偉大な師匠たちとして西洋で知られるようになりました。レーリヒ夫妻に師匠たちとの初めての個人的で重要な出会いがあり、その方々とずっと続く関係が確立されたのは、まさにロンドンでのことでした。レーリヒ一家が仕事の規模をさらに拡大するためアメリカへ行くよう指示されたのも、同じロンドンにいた時にです。それゆえシカゴ美術館からの招待は幸運な出来事で、彼らはアメリカへ行く船に乗ったのでした。

当時ニューヨークでは、到着の船から下船する前に、港で数時間、入国審査と健康診断と税関のチェックのため待たされることがしょっちゅうでした。この数時間の待つ間が、ジャーナリストたちに最大の関心の的である乗客と会いインタビューする機会となりました。「Musical America」誌は評論家のフランシス・グラントを、レーリヒのインタビューに遣わしました。以前のレーリヒの仕事仲間の多くが、革命を逃れすでにロシアからニューヨークに来ており、喜々として彼の到着を待ち受けていました。

フランシス・グラントは、よくレーリヒ夫妻と最初に会った時の話をしました。いかにして彼女を乗せた小舟がその船に近づき、彼女がファーストクラスの甲板へ縄ばしごを登り、「春の祭典」の有名な製作者に会ったのかを。最初に会った時、珍しいことは何もありませんでした。特別なこと、彼女にとって魔法にさえ思えることは、もっと後に起こるのでした。

2か月後、フランシスの友人の一人でディアギレフ（\*1）の「バレエ・リュス」の傑出したロシア人ダンサー、アドルフ・ボルム（\*2）が、自宅のクリスマスパーティーにフランシスを招待しました。ボルムはすでに1909年にパリで、有名な「ロシアン・シーズン」にてレーリヒと共に仕事をしていました。グラント嬢を招いた時、彼は家で彼女に、友人のニコライ・レーリヒとエレナ・レーリヒも来るだろうと言いました。

ボルムの家のパーティーで、レーリヒ夫妻は滞在中のアーティスト用ホテル「ホテル・デ・アーティスト」にフランシスを招待しました。それが彼女の全人生を変えることとなったのです。彼女はどんなふうに即座に、友人のように、まるで家族の一員のように、招待を受けたかを説明しました。彼女は「偉大な師匠たち」についてと、アメリカでのレーリヒ夫妻の使命について知らされました。それから、マハートマMの彼女に直接宛てたメッセ―ジを受け取りました。「それらの知らせを私は恍惚状態で聞いたわ。それがすべて本当であることと、世界を変えるはずの仕事に私が協力する運命だということを、少しも疑わなかったわ」とフランシスは私に語りました。

それと同時に、ニューヨークの大きなアートギャラリーで、レーリヒの大美術展が開催されようとしていました。シーナ・リヒトマン（後のフォスディック）はそのオープニングに出席し、レーリヒ夫妻に紹介され、直ちに夫と母ともども彼らの家へ招待されました。フランシス・グラントにも同じことが起きました。レーリヒ夫妻との出会いは、彼女らの人生を徹底的に変えたのです。

のちにシナイダ・グリゴリアエナ・フォスディックという名になった少女は、1889年頃オデッサ（訳注：ウクライナ南部の港市）で、シーナ・シャフランとして生まれました。幼い頃すでに音楽の才能を現し、母はこの子に、それこそ最善の音楽教育を何でも確実に受けさせました。そして実に、習い始めて最初の年に非凡な才能を示し、すぐにお客さんの前で演奏していたのです。高等学校をたったの12歳で卒業し、母は彼女をライプツィヒへ連れて行き、次にベルリンへ連れて行きました。ベルリンで彼女は有名なピアニストであり教師であったレオポルド・ゴドフスキーから学びました。しばらくしてゴドフスキーと最もすぐれた教え子の1人だったシーナ・シャフランは、ウィーンへ行きました。ウィーンでゴドフスキーは、ロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックのウィーンピアノ学校の校長職を引き受けたのです。

ゴドフスキーの学校を卒業後、シーナはしばらくヨーロッパで演奏をし、そして父の没後1912年に、彼女と母はアメリカへ行くことに決めました。ベルリンにいる間に、シーナは同級生のマウリス・リヒトマンと出会い、恋に落ちました。二人は結婚し、一緒にニューヨークへ移り住みます。ゴドフスキーもアメリカへ移り、リヒトマンがピアノを教え始めたニューヨークで、ピアノ協会を設立しました。のちにリヒトマン夫妻は自分たちのピアノ学校を設立しました。

レーリヒ夫妻と出会った後の1921年、リヒトマンピアノ学校と、レーリヒ夫妻の設立したスクール・オブ・ザ・アーツを合併させることが決定しました。しばらくして、シーナ・リヒトマンはレーリヒ夫妻が設立した文化的・教育的機関に加わり、ピアノの演奏法を教えました。のちに彼女はニコライ・レーリヒ美術館の副館長かつディレクターになりました。

シーナ・リヒトマンはレーリヒ夫妻の有名な中央アジア探検に、アルタイ山脈とモンゴルへ行く間参加し、ニューヨークへ戻って来ながら、婦人クラブ、国際会議、芸術関係の協会、図書館、さまざまな文化的組織に、広く講演しました。国際言語組合、メトロポリタン美術館、アメリカ博物館、国際地理学協会、「炎」協会の現役会員にもなりました。

シーナは生涯ずっと、ソビエト連邦も含めて世界中にいる協力者や友人たちとの文通を続けました。彼らの中にはアイデアや人生を捧げた人たちがいて、レーリヒ夫妻の仕事は彼らから特別な注目と支えを受けたのです。あの困難な時代に多くの人は、本当に精神的な支援を必要としていました。シーナは美術館で毎日働き、館の活動を運営し、アグニヨガ協会の定期的な集会を行ない、惜しまず訪問者に美術館を案内しました。

＊ ＊ ＊

話を1921年に戻せば、シーナも母のソフィア・シャフランも、神智学や他のどんな霊的な教えにもあまり関心がなかったことは特筆すべきことです。唯一つながりのあった霊的な教えは、モーリスの深いカバラ研究でした。しかし1920年にレーリヒ夫妻と出会ってからは、それらへの関心が人生の本質的な部分となり、人生を大冒険に変えたのです。

ニコライ・レーリヒが他界した後、シーナはその詳細と深い気持ちを、短いエッセイ「師との出会い」“Meeting My Master”に書きました。

「各個人の人生には、ある尋常でない、信じられない出来事が起こり、しばしばそれが全人生の進路を変えて夢にさえ見たことのない新しい方向へと向けるでしょう。その時にはこれまでの人生が終わり、新しい人生が始まるのです。

それはまさに、私がニコライ・コンスタンチノヴィチ・レーリヒと会った日に起きたことです。……

彼の知恵はこの世的であると同時に神聖なものでした。……彼が教えてくれたことは、とても全部は言葉に表せないでしょう。……つつましやかな感謝とともに、彼のことを、私に光の道と知識と人生の使命を示してくれた人と考えます。……途方もない霊的な宝をたくさん与えてくれたので、人々の人生が大いに豊かになりました。……

私はこの人生という稀少な贈り物を与えられました。偉大な魂、大師と会い、その弟子となるのを許されるという人生を。

心の中の言い表せない感謝とともに、彼の後について行きたいものです。わかっているのです、生命の永遠の流れの中で私は再び彼と会うだろうことを」。

私がシーナに最初に会った時、詳細を話してくれました。シーナがいかに単純に師匠たちの存在、シャンバラの存在、大同胞団に仕えるレーリヒ夫妻が委ねられた使命について説明されたかについてを。いつも私がこの話に驚くのは、そんなにも素早く簡単に、疑いもなく、シーナたちがその話を受け入れ、証拠や解説もなかったのに、科学的な傾向のある心と懐疑心を納得させることができたということです。

その後にレーリヒ夫妻がシーナに会った時、レーリヒたちは霊的な仕事のためと、文化的な組織を設立するために、ここニューヨークに遣わされて来たことと、そこに到着する前に、すでに前もってこの仕事を実現するためすぐ集められることになっているメンバーの名前を知っていたことなどを聞かされました。レーリヒ夫妻が普通の方法でグループのメンバーを捜す必要がなかったのは驚異的です。もう彼らの周りにいたこれらの人々を、集めるだけでよかったのです。これも興味深いことですが、これらの選ばれた人たちは、詳しい神智学徒では全くありませんでした。彼らは少なくとも今生では、霊的・秘教的な科学の初学者でした。

本格的な仕事が開始すると、レーリヒ夫妻は新しい弟子たちとの定期的な霊的会合をスタートさせました。それは毎週土曜日の晩か、時にはもっとひんぱんにありました。その会合で言われたことと起こったことはみな、シーナが日記に記録しました。でももちろん、ある出来事は公表できないし、それゆえに記録されませんでした。口頭でしか伝えられない事柄はありました。それらは生きた倫理（Living Ethics）の「神聖な神話」の一部になりました。

おおよそ3年後、レーリヒ夫妻はインドに出発しました。インドから、有名な中央アジアへの旅に出発するために。画家レーリヒの次男スヴェトスラフは、レーリヒ夫妻と仕事仲間たちがアメリカで設立した組織の経営に加わるため、すぐにニューヨークに引き返しました。ニコライとエレナ・レーリヒに集められた仲間たちの仕事は続いて行き、拡大して、人生を築く場所のどこからでも彼らは経営を管理し続けました。この仕事については、老いた夫妻の何百通もの手紙から多くのことがすでに知られています。世界中、多くの言語と国々でそれらは出版されました。

シーナはずっと日記を書き続け、夢、伝言、会話、成された仕事を、その窮境と失敗も含めて記録しました。それはレーリヒたちの霊的生活に関する珍しい情報と、レーリヒ運動の変遷を生き生きととらえた注目に値する記録で、もしこれに記録されていなかったら、私たちは知ることもなかったでしょう。これらの記録は私たちにとって特別な価値があります。それはシーナが外部の人たちには知られないレーリヒたちの精神生活と活動の、そしてさらにアメリカとロシアの両方における外的な仕事の最も重要な出来事のほぼすべての、直接の目撃者だからです。例えば1926年の夏に、シーナはレーリヒ夫妻とともに、信じられないほど重要な時期をモスクワで過ごしました。また、彼らとアルタイへ旅をし、次の年にはモンゴル行きに加わり、チベットへの探検旅行の出発までモンゴルにとどまっていました。シーナは、師匠たちの指導のもとに行われた仕事のそもそもの始めから、旅でしたことと経験したことのほとんどすべてを、レーリヒ夫妻と分かち合った唯一の人でした。

ニコライ・レーリヒはさらに2度、ニューヨークへ来ました。シーナはニコライとの交流から受けた印象と、彼の霊的指導および組織の活動への経営上の指導を観察して受けた印象を、詳細に記録しました。そしてその後の1928年、彼女とフランシス・グラントは、探検旅行を本にする取り組みのために、ダージリンにいたレーリヒ夫妻を訪れました。

残念なことに1930年代の中ごろ、順調だった米国におけるレーリヒの団体の広範囲な文化的・教育的仕事の運営に加え、南北アメリカの国際レーリヒ条約の制定が、厳しく厄介な年月に取って変わりました。その頃、経営と財務上の処理に力を注いでいた、グループ内の3人のメンバーが、レーリヒ夫妻を見捨て、そこにあるすべてのものと建物と美術品もろともに、まんまと美術館を奪い取り、組織全体の努力と仕事に賠償できない損害をもたらしたのです。そしてその頃は、シーナの日記とレーリヒたちの往復書簡のすべてが同じように、これらの問題で埋め尽くされていました。対審、個人的対立、大きな損害と苦々しさで満ちていたのです。でも日記はなおも続き、新たな決定と、初めの目標へ向けた新たな仕事の始まりを明らかにします。

＊ ＊ ＊

残念ながらこの版に、何巻にもなる日記の全部を載せることはできません。そしてそれは多分、必要ないです。実際の日記の記録は多くの情報を含んでいて、一般の読者はそれに関心がないでしょう。私たちの意見は、こうした記録さえもレーリヒたちの遺産に興味ある人々や研究者たちに伝えられるべきだというものでしたが、大量の本文から成るテキストはすべてこの本に含めることができないのでした。シーナとレーリヒ夫妻に直接交流のあった期間、最初の出会いから1934年の最後の別離までの期間に、記録を限定することを余儀なくされました。

あるいはこの日記の内容の多くが、読者を当惑させるかもしれません。現実の人生はたいてい、予想した通りにはならないもので、新しく発見された実際の見聞はしばしば私たちの誤った、すでに固まった精神的な着想を粉々に砕くのです。

だから、例えば多くの人は、「生きた倫理の教え」を素晴らしいと思い、エレナ・レーリヒの、交霊術についての最新の純粋に否定的な判断に基づく見地から、レーリヒ夫妻自らはもちろんそのような方法を人生であやうく用いようとすることなど決してない、と確信します。でもまず忘れてはならないのは、あの世からの情報源（大多数の場合、完全につまらなく、間違った、闇のものですらある）を盲目的に信頼するため、大まかに関係あるとされる現象として交霊術をひどく非難する一方で、エレナ・レーリヒは真に高い情報源から媒体的手段を通して情報を受け取る実際の可能性を否定したことはありませんでした。彼女は自分の弟子たちへの手紙の中で繰り返し、偉大な師匠たちは、ご自身および精妙界にいる弟子たちを通しての両方の方法で、霊的に清い媒体を通して人々に高い教えの基礎を与える機会を利用しようとする、と言いました。だからこそ、彼女は高い界からの情報を参照しているある資料を厳しく批判しながら、他のものを同じくらい断固として支持します。

その上偉大な師匠たちの、よく知られたこの世の使者たちが、魔術のように直ちに彼らの専門知識のレベルに達したとは考えられません。エレナ・ブラヴァツキーの人生と偉業に興味のある人なら誰でも、この傑出した女性のことをよく知っています。彼女は現代の秘教の知識の最も偉大な中心人物になったし、西洋世界のために偉大な師匠たちとの開かれた、確実な正真正銘の接触を達成し、超心理的な英才児で、青年期にはすでに抑制されていない霊媒に変わり（本人は後にそのことを嫌悪とともに思い出しました）、そしてただ自分の英雄的努力のおかげで自分の本性を習得し、オカルト科学の顕著な代表者になったのです。同じ成長のパターンが他の多くのケースにたやすく確認できます。

レーリヒ夫妻もある人たちが思うように、すぐに師匠と絶えず直接コミュニケーションを取ることが許されたのではなかったのです。彼らはかなり長く複雑な道を通ってそのようにできるようになりました。そのことはエレナ・レーリヒの手記とシーナ・フォスディックの日記に詳細に記録されています。エレナ・レーリヒは幼い頃から霊的な能力がありました。非常に多くの素晴らしい夢とビジョンが、彼女の前に崇高で人を引きつける超現世的な現実の世界を開きました。その世界で、彼女は高次の擁護者を得ました。その擁護者は何度も助けてくれて、危機的状況で必要な助言を与えてくれたのでした。自分に何が起こっていたのかを理解するためにその少女は哲学的、宗教的、神秘的な文献に没頭し、初期キリスト教の修道士である「善への愛」（フィロカリア）の著者たちの体験などを熟読しました。ニコライ・レーリヒの霊的探究もまた、背後に偉大な師匠たちとの特別なつながりがあることを示す最も深い洞察力により、幼い頃から顕著でした。それは彼の自由詩にたやすく辿ることができます。彼が「モリヤの花」と呼んだ詩集の、自分と直接で紛れもない結びつきを築いた師匠を敬う詩です。

1919年にロンドンで、ついにレーリヒ一家は神智学の全文献と、先輩エレナ・ブラヴァツキーの霊的遺産とめぐり会いました。それらは偉大な師匠たちの同胞団についての知識をたっぷり提供したし、すでにレーリヒたちの教えの基礎を含んでいました。エレナ・レーリヒに2人のマハートマたちとの肉体での予期せぬ出会いがあったのもロンドンでのことです。これらすべてによりレーリヒ夫妻はどちらも、長年の人生における数多くのビジョン、洞察、高いインスピレーション、奇跡的な出来事を、１つの鎖に結びつけることができました。おそらく、レーリヒ夫妻がマハートマM、マハートマKHとの永続的なきずなを確立することになったのは、まさにこのロンドンでの出会いにおいてです。このお二人のマハートマはすでにブラヴァツキーの師匠であり守護者でした。レーリヒ夫妻が師匠たちとの対話を確立するために最初の試みを始めたのもこのロンドンでのことでした。その試みは当時から広く知られていた心霊主義者の集会の方法を用いて、行われました。シーナ・フォスディックの日記の中の集会の記述に加えて、この出版された本には、ウラジミール・シバヤフ（\*3）のロンドンでのレーリヒ一家との出会いと、彼らが行なった集会に参加したことに関するきわめて興味深い、そして魅力的な短い記録が含まれています。その集会で最も驚くべき現象が起こりました。重いテーブルの空中浮揚に始まって、多種多様な物体の物質化現象が起きたのです。

これらのレーリヒ夫妻の初期の実験を理解しようとする時、忘れてはならないのは、当時すでに彼らが偉大な師匠たちとの長く、疑う余地のないつながりを持っていたことと、それゆえに返答があると確信して、直接の対話を確立するために夫妻の側で方策を講じずにはいられなかった、ということです。そして、それは実現しましたが、当然のことながら霊媒的な接触の方法は本当の師匠たちとのやり取りの確かさとしては、絶対的な質の高さも完全なる確実性も、どちらも提供できませんでした。連絡方法を創り出すには約１年半かかりました。エレナ・レーリヒの手書きによるこれらのセッションの記録によれば、彼らがマハートマMとの完全で明白なつながりを確立したのは、ニューヨークに来て以後が初めてです。いわゆる自動書記による最初の記録は、ほとんどニコライ・レーリヒによりなされました。これらのすべてのセッションに出席していたシーナは、たびたび私に、レーリヒは霊媒的なトランス状態に入ることはなく、意識の完全な明快さを維持し、それゆえただの受身的な「受信者」ではなかったことを強調しました。レーリヒ夫妻のもう一人の密接な協力者であるギゼラ・インゲボルグ・フリッチは次のように説明しています。「彼（レーリヒ）は時々、目を手のひらで覆いながら頭を少し横へ動かしました。そしてすぐに書くか、または描き始めました」。

同時期に、いつもセッションに出席していたエレナ・ レーリヒは、私たちの美術館（ニコライ・レーリヒ美術館）に保管されている彼女自身の記録が証明するように、師匠の直接の監督下で透視力と透聴力の資質を発達させることを続けていました。これらの記録およびエレナ・レーリヒの夢とビジョンに関する記録は、毎朝早い時間の意識のレベルで自分の有機体に微妙なバイブレーションを知覚させる、斬進的で、長くかかる、複雑な過程について語っています。

エレナ・レーリヒがこの能力の達成により、自分の大師との接触を記録する仕事を引き受け、アグニヨガの教えの新たな発展の段階が始まりました。アグニヨガの教えは、エレナ・レーリヒの中枢（チャクラ）と有機体全体の、アグニヨギ的変質による参加を必要としました。火のヨガの信じられないほど複雑な実験をリアルに体験し、エレナ・レーリヒは「教え」の本の、真の共著者になったのです。後に師匠が彼女のことを「アグニヨガの母」と呼んだのも驚くにあたりません。

ですから、レーリヒ夫妻は、微細で火的な霊的達成の頂上へと続く、この世の個人的な、不可避で漸進的で複雑でもある道を、少しも避けていません。おそらく、このような上昇の原理に関する最も簡潔で一般的な説明は、「ハート」という本の中にあります。「ハートが天のものと地のものを包含している時、最初にこの世的な集中、次に微細なこと、そしてその次に火的なことが起こる」（ハート587）。

また、多くの人々にとって思いがけないのは、シーナの日記が率直で直接的な方法で実際の日常生活を映し出しながら、レーリヒ夫妻の非常に現実的で気取らない姿と、自然な人間的側面も記録しており、それはしばしば公式の伝記から除外されているということです。霊的な師匠を崇拝することは、人間性に内在することです。しかし一部の人々はさらに進んで、自分の師匠に神の完全さ、純粋さ、全知さを認めます。多くの人がこの世界の絶対的な完全さの例を見てみたいと思います。もしそれを自分の隣りで見つけられないなら、人は並外れた人物の肖像から想像力でそうした理想の形を創造します。実際には根拠がないという事実を心配する必要はないのです。

自然界には完成がありません。存在するものの進化とは、完成へと向かう骨折りの無限に長い過程です。そして上昇のはしごが私たちにとって高いなら、私たちの師匠と指導者と大師たちを含めて宇宙に存在するすべてのものにとっても同じく高いのです。完成の域に本当に達してしまったら、おそらく誰にとっても大きな失望となるでしょう。なぜなら、霊的人生の大きな喜びが含まれているのはまさに、成長のための苦闘の中だからです。完成が経験できるものだとしたら、それは静的な状態だろうし、どの師匠もそのような所に居場所を得たくないでしょう。

この出版された日記には、私たちが完璧であってほしいと望む人さえも持つ人間の弱さの表れがたくさん載っていて、説明されています。私はこのことに感銘を受けました。なぜなら、たとえ遠い将来であるとしても、誰もがこれらの真に偉大な人々が手に入れたのと同じ意識の発達段階に達する本当の可能性を証明しているからです。私たちより先にこの道を旅して、あらゆる困難と達成の経験、そして想像の中だけの幻想にすぎない既製品の絶対的完全さではない、本当の経験を通して道を示した人たちの例より他に、自分自身の不完全さとの闘いへの強い推進力となり得るものがあるでしょうか。そのような経験の直接の証拠を得るという幸運がある時、私たち自身の不完全さはどういうわけか、それほどひどくなく、乗り越えられると言ってもよいものとなります。そして、この本の真実のページを読むと、同じように感銘を受ける人がいると、私は確信しています。

ロシアで私は時々、ニューヨークのレーリヒ美術館がロシアで出版できる資料をたくさん本にしている理由を尋ねられます。その答えは、本質的に非常に単純です。私たちの活動の歴史を最大限詳細に記録し、すべての情報を保存するためです。歴史家とあまねく一般人の両方が、レーリヒたちのメンバー全員の仕事と人生について最も完全で、包括的で、正確な印象を持つべきです。保管文書があまりにも多くの場合、ひどい秘密でも含まれているかのように守られているのを見ますが、本当は誰もが興味のある保管文書の情報にアクセスする権利を持つべきで、自分自身の結論を引き出す権利があります。まさにそれが、保管資料の公開に関する私たちの目標です。

隠された情報は、ある程度の力とコントロールの可能性を提供し、それがその情報を独占したいという欲求を引き起こします。秘密の「保管者」は特定の現象つまり自分の手の内にある情報を理解する独自の方法と合致するものだけを公表します。保管者に採用されたイメージと矛盾するものはすべて、通常、誰の目からも隠されているか、または破棄さえされます。それは大きな悲劇です。

レーリヒ夫妻に関して、もちろん私たちは皆、これらの偉大な人たちが本当に何なのか、アグニヨガの教えの発展における彼らのそれぞれの役割は何だったのかについて、自分たちの考えを大事にしています。私たちは彼らのイメージを理想化し、ますます完璧なものとし、非現実的で生命がなくなり、天使や神に似るようになるまでそれを続けます。でも現実は全く違うし、私たちはそれを受け入れる準備ができているはずです。レーリヒ夫妻はその真の偉大さにもかかわらず、人間であり、人間的な欠点と弱さを持っていました。そして、これらの人間的特徴は、彼らの並外れた能力と才能と結びつけられて、彼らを信じられないほどの精神的な豊かさのある人々にしますが、それでも人間なのであって、私たちは人間として理解できるから、彼らの例に倣うのです。彼らは、私たちがいつの日が似た人になっていたいと願う人々でした。

この日記は、おそらくレーリヒの弟子たちの中で最も傑出した人物によって書かれたものです。そんなわけでこれらの記録はレーリヒたちのすべての精神的偉大さと、すべての人間的な性質の両方を示しています。そのことだけが、シーナ・フォスディックの日記を、そのテーマに興味のある人にとっての真の宝物にしています。「生きた倫理」の教えの発展の物語の、以前は完全に知られていなかった多くの側面とその源についての知識は、言うまでもなく私たちが深く感謝できるものです。

レーリヒ夫妻の公的な霊的仕事の真の夜明けに、最も近しい仕事仲間となった人、師匠たちとその仕事に生涯を通じて無限の献身を捧げた人であるシーナの、このような（日記中の）目撃証言の価値のほうを過大評価することはできません。エレナ・レーリヒは、教えと運動の全業務の両方の、忠実な管理者に、シーナを選任しただけのことはあったのです。そして老年期には、多種多様な文通相手への手紙の中で、最も親しい、最も信頼できる、誠実な仲間はシーナ・フォスディックであると、繰り返し断言しました。

ですので、エレナ・レーリヒは極東で最も近しい弟子のボリス・アブラモフへの手紙の中で、次のように書いています。

「シナイダ・グリゴリアナ（・フォスディック）は長年私の信頼できる友人であり、同僚でした。彼女の全存在は、奉仕とGr L（Great Lord）［大いなる主］に捧げられています。彼女は、仕事の創設と、N.K.の創造的作品を守り、私にとって大きな助けとなります。彼女でなかったら、私の手は縛られ、主な仕事を続けることはできなかったでしょう。

私は彼女を完全に信頼し、彼女の絶対的な無私無我とGr Lへの献身を知っています。いつも自分の仕事で忙しく、おべっかは使わず、他人を信用します。感傷的ではなく、他の人が気づいていないことを多く見て、感じています。彼女がするように指示されたものを成し遂げるために、すべてを犠牲にする準備ができています。私たちはこのことの多くの例を知っています。

彼女は私たちの仕事と平和の旗印の基礎を守り、またアグニヨガ協会とそのすべての出版物の活動を続けるという非常に大きな任務を任されました。彼女は彼女の夫と一緒に、教えの本の翻訳をすべて編集し校正します。そのような献身的な働き手は、評価され尊敬されるべきです。

私は彼女を愛し、彼女が最も大切な同僚であり友人であると断言します。彼女は金のハートを持っていて、人々がいつか持つことになっている洞察力をすでに発達させました。多くの国の人々との交流経験が豊富です。最も近い同僚である私たちと同じように彼女を高く評価してください。彼女と、彼女の謙遜で勤勉な夫を重んじてください。彼女の夫は同じように奉仕に専念し、「仕事」を助けるためだけに、すべてにおいて自制する人なのです」。

私たちは、シーナが日記を正確にレーリヒ夫妻と会うことから始めたという事実に注意を払うべきです。彼らの壮大なスケールの人柄と未来の使命の重要性を実感したシーナは、観察したことと印象を記録し始めることを決めたのでした。レーリヒたち自身はこのような、偏見がなく信頼できる「年代記作者」の出現に非常に満足しており、この（年代記の）企画で全面的にシーナを支え、しばしばある事を記録するのに助言を与えました。この日記を念頭に置いて、エレナ・レーリヒはかつてのロシアにおける生活の、類なき詳細をたくさん、シーナに率直に伝えました。同時に、本当に自由で独立した情報源だけが後世にとって最も価値があることを明らかに理解していたレーリヒ夫妻は、どちらも日記の記録される過程をコントロールしようとはしませんでした。その結果として、偉大な人々の大いなる霊的そして文化的使命に光を当てる真に比類ない情報源を、私たちはここに持っているのだと言えます。

シーナがあの世へと旅立つ準備をしていて、私が彼女の仕事を続けると約束した時、最初に何をすべきか彼女の意見を聞きました。

「私の日記を研究して。その中に仕事の資産を管理する十分な基盤があるでしょう。そして、どうかロシアの友人たちを助けるという私の使命を継続してちょうだい」。

現在、彼女の日記を出版するのは、私にとってその約束を果たすことの一部なのです。

ダニエル・エンティン

ニコライ・レーリヒ美術館 専務理事

ニューヨーク

2015年2月

＊　　＊　　＊　　＊ ＊ ＊

脚注

\*1 Adolf Rudolfovich Bolm(1884-1951) バレエダンサー、振付師。1916年からアメリカに住み、Master Institute of United Arts でバレエを教えた。

\*2 Selgei Pavlovich Diaghilev(1872-1929) ロシア人芸術評論家、劇場支配人。「ワールド・オブ・アート」運動の創立者の一人。パリで有名なバレエ・リュスの創設者でもあった。1905年から引退しパリに住んだ。

\*3 Vladimir Analtolievich Shibayev(1898-1975)（秘教的名前は「ヤルヤ」）。長年、ニコライ・レーリヒの親密な弟子であり秘書であった。

\*4 Gisela Ingeborg Fritschi(1899-1996) 1920年に彼女は、マサリク一家の親友であり、T・マサリクの秘書だった。マサリク氏の指示で彼女は米国に留学し、残りの人生をそこで過ごした。レーリヒ運動の活発なメンバーであり、アラン・K・キャンベルの最も親しい友人であり同僚であった。1950年代から、ニコライ・レーリヒ美術館の理事会のメンバーだった。K・キャンベルとともに西ドイツでレーリヒ協会を設立し、ジュネーブでコロナ・ムンディ協会を再建した。

（星野 未来 訳）